子どもたちの知のデータベース『総合百科事典ポプラディア』をつくる

Editing The Encyclopedia Poplardia, a knowledge database for children

飯田 建¹

IIDA Ken¹

.....

1 株式会社ポプラ社 ポプラディアネット局 (〒160-8565 東京都新宿区大京町22-1) E-mail: info@poplardia.com
Tel: 03-3357-2256

1 POPLARDIANET, POPLAR PUBLISHING CO., LTD. (22-1 Daikyo-cho Shinjuku-ku, Tokyo 160-8565)

原稿受理 (2011-06-14)

情報管理 54(5), 243-253, doi: 10.1241/johokanri.54.243 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.243>)

著者抄録

小中学校の「調べ学習」や「総合的な学習の時間」において、子ども用百科事典は重要な役割を果たす。『総合百科事典ポプラディア』全12巻は、9年前に刊行され、このたび改訂された日本で唯一の子ども用百科事典である。『ポプラディア』刊行は、子どもたちの「生きる力」、問題解決力を育てる教育のなかで百科事典を望む声が大きくなっていったことを背景としている。『ポプラディア』は五十音順の百科事典である。項目の選定や編集方針をはじめとする製作の過程について解説し、学校図書館における利用について紹介する。さらにデジタル化およびインターネット版「ポプラディアネット」の開発、9年ぶりの改訂について記す。あわせて図書館とインターネットが教育の中で果たしている役割と課題についても触れる。

キーワード

百科事典, 知識, 用語, 編集, 学校図書館, デジタル化, オンライン, データベース, インターネット, 情報教育

1. はじめに

人類の英知をわかりやすく解説したデータベース、それが子ども用の百科事典である。子どもたちの学習の中で、百科事典が大きな役割を果たすようになっている。

『総合百科事典ポプラディア』(以下『ポプラディア』と記す)は、現代の日本で唯一の子ども用の百科事典シリーズである。子どもたちが使っている百科事

典とはどのようなものなのか、その概略と製作の過程、百科事典が必要な学習について解説する。あわせて図書館とインターネットが子どもたちの学習の中で果たす役割と課題についても述べたい。

2. 記録的なヒットとなった百科事典『ポプラディア』シリーズ

シリーズ全体の出発点は、2002年3月に刊行された

『ポプラディア』全12巻、小学生から中学生を対象とした五十音順の百科事典である。本書は2005年2月に補遺版『総合百科事典ポプラディア プラス1 -2005補遺-』を加え、13巻セットとなり、合計約50,000セットを販売した。日本全国の小中学校ほとんどすべてで利用されている。この『ポプラディア』を補い、発展させるものとして、前述の補遺版をはじめ、いくつかのシリーズを刊行した。テーマ別の『ポプラディア情報館』（以下『情報館』と記す）シリーズ、インターネット版の「ポプラディアネット」、月刊誌の『月刊ポプラディア』などである。これらについては、別章で解説する。

初版発行から9年を経た2011年1月、内容を一新した『総合百科事典ポプラディア 新訂版』全12巻（以下『新訂版』と記す）を刊行した（図1）。この『新訂版』は、刊行時に10,000セットを超える予約を得、新年度となった現在も好調に販売成績を伸ばしている。1セット約10万円という百科事典が9年間も売れ続け、その新訂版が予約で10,000セット受注するというのは、出版界の常識では考えられない実績である。

ここで筆者と本シリーズとの関わりについて記しておきたい。『ポプラディア』の着手時に筆者は編集担当の一人であり、後述する大きな枠組みをつくる過程のすべてに関わってきた。編集の作業が進む中

図2 『総合百科事典ポプラディア 新訂版』の本文

で異動し、初版刊行時は製作、宣伝の責任者を務めていた。『ポプラディア』刊行後、本書をデジタル化しさまざまな発展させることとなり、編集部に戻り、補遺版、月刊誌、『情報館』シリーズ、デジタル版などシリーズ全体の責任者となった。

編集が続いている子ども用百科事典の編集長という特異な立場であったがゆえに、日本全国の学校、公共図書館、教育委員会などで指導的立場にある方々に知己を得た。その結果、この数年、年間30～40回は、学校の授業で子どもたちに直接『ポプラディア』の使い方を教えたり、先生方の研究会で講習などを行ったりしている。また、書籍、雑誌、インターネットを統括する立場であったために、図書館関係者と情報教育関係者、双方の方々と交遊いただいた。これら現場での経験も本稿の背景となっている。

3. 子ども用百科事典を企画した背景

百科事典というと、平凡社や小学館、ブリタニカなどから刊行された大人用の大部のものを思い浮かべる人も多いだろう。日本には優れた百科事典がたくさんあり、かつて家庭などにも多く販売された。子ども用においても玉川大学出版部刊のものなど、多くの百科事典がつくられてきたが、『ポプラディア』刊行以前は、しばらく新しいものがつくられていなかった。

大人用の百科事典は、急速にデジタル化が進み、

図1 『総合百科事典ポプラディア 新訂版』（全12巻）

身近なものとなっていった。パッケージソフトとしてCD-ROMやDVD-ROM版がつくられ、やがてインターネット版が開発された。電子辞書にも搭載されていった。こうしたデジタル化の流れの中で、書籍ではなされなかった情報の更新が行われたものが多い。

子ども用の百科事典は、書籍でもデジタルでも新しいものはつくられていなかった。だが、真に百科事典を求めていたのは、子どもたちと学校だったのである。

子どもたちの学習は大きく変わりつつある。暗記して知識を蓄積していく教育から、「生きる力」を身につけるための教育へと変化してきている。ここでいう「生きる力」とは何か。もちろん学習の基礎となるものは覚えるしかない。しかし、現代の社会を生き抜いていくには、まだ一度も出会ったことのないような問題に日々向き合っていかなければならず、問題を解決する力の方がむしろ重要になる。その問題解決の力を養うために、「調べ学習」や「総合的な学習の時間」がある。

「調べ学習」も「総合的な学習の時間」も、子どもたちが主体的に図書資料やインターネットなどを使って調べる学習である。社会科や理科など教科の単元の中で行われ、与えられたテーマを調べるのが「調べ学習」であり、テーマを自ら探すところから始めるのが「総合的な学習の時間」である。調べるという学習活動の中でその第一歩となるもの、それが百科事典なのだ。調べ学習が盛んになり、総合的な学習の時間をどのように行っていくかが検討される中で、百科事典を望む声が大きくなっていった。

こうした流れのなか『ポプラディア』は企画され、こうした学習に応えることができる唯一、最大の資料であるがゆえに、これだけのヒットとなったのである。

4. 製作の過程

4.1 テーマ別、教科別か、五十音順か

あるとき、小社の坂井宏先（現在は社長）が、学校図書館の指導的立場にある先生から「子ども用の百科事典がない」という示唆を受けた。その一言から本プロジェクトはスタートした。

百科事典といっても、さまざまなタイプのものがある。どのような百科事典をつくるのか、決めていかなければならない。まず、規模と想定価格を決めた。単冊ではいかにも情報量が少ない。ある程度の情報を網羅しようとする、分冊とせざるを得ない。子どもたちが取り扱いに困るような大きさにはできないので、大きさ、厚さもイメージし、パッケージ全体としてはこれくらいの大きさであろう、そしてそれならば、価格としてはこの程度であろう、という大まかなことを決めた。

これと並行して悩んだのが、テーマ別、教科別にするか、五十音順にするかである。編集部は、テーマ別を支持する意見が当初多数を占めた。テーマ別のほうが圧倒的に作りやすいからである。テーマ別であれば、目次をつくり、論を積み上げていくことができる。章ごとに、見開きごとにつくっていくことができる。用語を解説するうえでも、これは前章で説明済み、として進めることができる。つまり普通の本の作り方の延長線上でつくることができるのだ。五十音順となると、その項目単独で理解できるよう原稿を整えなければならない。そして、見開き内にあらゆるテーマ、ジャンルの用語が並ぶ。つまり、すべての原稿ができてからではないと、レイアウトすらできないということになる。百科事典を初めてつくる編集部としては、これらの事態を恐れた。

しかし結局は五十音順を選択することになった。主な理由は2つある。1つは、調べ学習などで求められているのは、特定のキーワードに素早くたどり着くことであろう、ということ。2つ目は子どもたちが

探そうとするキーワードが、うまく特定の言葉でまとめられたテーマにおさまらないのではないかとということである。

「このキーワードはどの巻で調べればいいだろう？」などということを考えさせるようでは使ってもらえないのではないかと、またそもそも、現在の社会は複雑化しつつあり、テーマ別におさまりきらない用語が増えているのではないかと考えた。解説が必要な用語を適切なテーマに分けて、網羅的に配置することは大変困難なのだ。また、図書館の考え方によるが、テーマ別にすると、それぞれのテーマごとの書架に分けて配架される可能性がある。この場合、さらにキーワードにたどり着くことが困難になる。こうして五十音順とすることを決めた。

4.2 項目の選定

次は項目の選定である。これは当時の教科書を調べることから始めた。

小中学校の全学年、全教科、全出版社の教科書を購入し、そこに掲載されている語のリストをつくっていったのである。これが選定基準の第一優先順位となった。これに、数年分の小学生新聞、中学生新聞、学年誌を加えていった。さらに、『現代用語の基礎知識』（自由国民社刊）、『imidas』（集英社刊）、『知恵蔵』（朝日新聞社刊）など当時の年度版の用語集数年分を加えた。最後は一般向け百科事典との突き合わせである。このほか、図鑑など、ジャンルによっては別の資料も突き合わせた。こうして縦軸に用語、横軸にその語の掲載元をあらわした、膨大な語のリストが出来上がった。これを頻度順に並び替えた。頻度だけで語の軽重が決まるわけではない。用語をジャンルごとに分解し、各ジャンルの専門家とジャンル内での語の過不足を精査した。

こうして広く拾い集めた語を絞り込んでいったのである。いくつに絞り込むかもまた悩みの種であった。語を解説するのに必要なボリュームを、特大、大、中、小に分け、想定したページ数、行数の中で何項

目おさめられるかを計算した。

ジャンルごとに絞り込んでいく作業を依頼した専門家、研究者にはそのままそのジャンルの指導をしていただいた。また直接の執筆もお願いし、その他多くの研究者、専門家もご紹介いただいた。こうして100人以上の執筆者が一斉に原稿に着手した。

4.3 編集の方針と実作業

原稿執筆の方針として、正しいこと、わかりやすいことは当然のことであるが、読んで楽しいことを心がけた。知る喜びが得られるよう、まるで物語を読んでいるかのごとくワクワクするものを、ということである。

一般の百科事典の多くは、記名原稿である。各項目の解説は、執筆者のいわば小論文のようなものであり、学説等は、執筆者の判断、責任に任される。ゆえに執筆者の主義主張があり、項目間に整合性がなくても問題にはならない。数十巻にも及ぶものをつくり上げるうえではやむを得ないことであるとともに、一般の用をなすものとしては当然のことである。

しかし本書は、子どもたちが読むものである。できるかぎり客観的で、できるかぎり定説を取り上げ、項目間で表記のゆれや、立場の違う解説となることは避けたい。そこで本書では、基本的に無記名とし、編集部の責任でこれらの調整を図ることにした。

「正しく」と「わかりやすく」は必ずしも容易に両立するものではない。「わかりやすく」噛み砕いていくと、科学として「あいまい」な表現となり、「誤解」を生むことにもなりかねない。項目解説中に別の用語が登場するのは当然のことであり、これらを無制限に説明なく使っていけば、執筆は容易になるが、読者の理解を遠ざけることとなる。

こうしたせめぎ合いが、すべての項目で起こった。専門家の書いた原稿を編集部でリライトし、それをまた専門家に確認してもらう。お互いが納得できる妥協点を繰り返しのやり取りの中で見出していくし

かないのである。

原稿の執筆を行いながら、写真の収集やイラスト、図表類も作成していった。各項目の必要に応じて作成したのであるが、現実には紙幅の限界もあり、また見開きごとのビジュアル的要素にボリュームの差がありすぎるのも好ましくない。しかしすべてを用意し、レイアウトを開始してみないとわからなかったことも多い。せっかく用意しながらやむを得ず削除したものや、逆に追加したものも多数ある。

編集作業を進めながらも、新たな発見による学説の変更や社会の変化などには、当然対応しなければならない。こうした変化、進化に対応して、項目の追加と削除、原稿の修正が校了時ぎりぎりまで続けられた。しかし、「旧石器遺跡捏造事件」や「アメリカ同時多発テロ事件」は、想定外に広範囲かつ大幅な内容の見直しを迫る容易ならざる事態であった。

なお、『ポプラディア』シリーズは基本的に、現代日本語を現代仮名遣いで書き表している。漢字は、固有名詞や専門用語などの一部例外を除き、常用漢字を使っている。また、小学生4年生以上で学習する漢字にはふりがなをふった。

5. どのように使われているのか？

『ポプラディア』が一番多く使われている場は小中学校の図書館である。社会科など教科の学習の中で、前述の「調べ学習」が多く行われている。教科書に「図書館で調べてみよう」とか「インターネットで調べてみよう」などの指示があるものもあれば、先生方独自の判断で行われることもある。

「総合的な学習の時間」は、子どもたち自身が自らテーマを決め、自ら調べ、自らまとめ、発表する学習である。1年間かけて行われることが多い。『ポプラディア』はすべてのジャンルをカバーしているので、調べる第一歩としてはとても有効な資料として使われている。

図書館の利用指導の中で、知りたい情報にいか

にたどり着くかは、大変重要な基礎的スキルであるが、残念ながら十分指導が行き届いているとは言えない。図書館の中で「調べましょう」と言われて、どの本をどう見てよいかわからず、書架の前をうろろろするだけで1時間が終わってしまったというのは珍しいことではない。分類を理解し、配架のルールを学び、書名・著者名・件名といった目録の検索、目次や索引、奥付の理解などの基本的スキルは、繰り返し行わないと身につかないものである。『ポプラディア』は、一番便利で役立つ資料であるとともに、こうした学習を行っていくうえの第一歩として活用されている。

一度も手に取ったことのない子どもにとって、『ポプラディア』は厚くて重くて、なんだか難しそうな本に見える。しかし、一度でも手に取った子どもにとっては、何か調べるときにまず手を伸ばす大切なものとなる。『新訂版』で約25,000項目あり、索引巻を利用すれば50,000語を検索できる(図3)。「調べたらわかった」という喜びが得られる本なのだ。この成功体験が継続的な調べ学習につながっていく。

筆者は『ポプラディア』を通読した小学生2人に出会った。最初の1人との出会いは強烈だったのでよく

し	情報 [じょうほう]⑤ 208
	情報オリンピック [じょうほうオリンピック]
	→国際科学オリンピック [こくさいかがくオリンピック]
	情報格差 [じょうほうかくさ]⑤ 208
	→高度情報化社会 [こうどじょうほうかしゃかい]
	情報化社会 [じょうほうかしゃかい] 図⑤ 208
	→高度情報化社会 [こうどじょうほうかしゃかい]
	情報家電 [じょうほうかでん]⑤ 209
	→インターネット →携帯電話 [けいたいでんわ]
	情報技術革命 [じょうほうぎじゅつ] 図⑤ 209
	→革命 [かくめい]
	『正法眼蔵』 [しょうほうげんそう]⑤ 209
	→曹洞宗 [そうとうしゅう] →道元 [どうげん]
	情報公開条例 [じょうほうこうかい] 図⑤ 209
	→情報公開制度 [じょうほうこうかい]
	→知る権利 [しるけんり]
	情報公開制度 [じょうほうこうかい] 図⑤ 209
	情報公開法 [じょうほうこうかい]⑤ 209
	→行政 [ぎょうせい] →知る権利 [しるけんり]

図3 『新訂版』の索引

覚えている。『ポプラディア』の利用方法を指導する授業中、よく発言してくれた子どもなのだが、会話が噛み合わなくて、もどかしさを感じた。授業のあとわかったのだが、彼は私の授業を受けるまで百科事典の本来の利用方法を理解していなかった。彼は調べることなく、1巻の1行目から最終巻の最後の行までを読み通していたのである。彼にとって『ポプラディア』は、知らないことが書いてあり、しかもそれがすべて「本当のこと」であるという強烈なエンターテインメントの書だったのだ。2人目も同じような子どもであった。

児童文学評論家の赤木かん子氏は講演の中で、子どもたちの読書傾向を「空想系」と「リアル系」に分けて考えている、と語る。「空想系」の子どもは、「ものがたり」が好き。「ものがたり」の中で想像をめぐらし楽しむことができる。「リアル系」の子どもは「ものがたり」を読むのが好きではない。ただし「本当のことが書かれている本」を読むのは好きなのだという。

世の中で「本嫌い」と思われている子どものうち、かなり多くがこの「リアル系」ではないだろうか。読書指導を通じて「ものがたり」の本としか出会っていないがゆえに、「本が嫌い」と思われている子どもが少なからず存在するのである。

筆者が授業をしたクラスで、多くの先生方から、「あ

の子があんなに楽しそうに発言するのは初めてみた」などと言われた。読書の時間、いつもつまらなそうにしていた子や、図書館嫌いと思われていた子どもである。彼らの多くが「本当のことが書かれている本」に出会ったとき一変する。赤木かん子氏によると、『ポプラディア』は、「本当のことが書かれている本の王様」なのである。

6.『月刊ポプラディア』の発行とデジタル化

最初の『ポプラディア』刊行の直後から、デジタル化に着手し（表1）、それとほぼ同時に『月刊ポプラディア』（図4）を刊行した。

『月刊ポプラディア』は、総合学習応援雑誌を謳い、毎月1テーマを詳細に解説するものであった。同時に補遺の役目も果たし、毎月新規項目を掲載した。百科事典の必要性をアピールし、新しい情報を届けるという役割を担うものであったが、『新訂版』の刊行を機にその役目を果たしたとして、2011年4月号をもって休刊とした。

デジタル化はまず2004年12月に『総合百科事典デジタルポプラディア2005』として、いったんDVD-ROMのパッケージソフトで刊行した。その翌年、『総合百科事典デジタルポプラディア プラス1 2006』

表1 『ポプラディア』シリーズの歩み

1998年12月	文部科学省が学習指導要領を告示。『ポプラディア』の企画を本格的にスタートさせる
2002年 3月	『総合百科事典ポプラディア』（全12巻）刊行 同書が2002年度の第4回学校図書館出版大賞を受賞する
2003年 9月	『月刊ポプラディア』創刊
2004年12月	『総合百科事典デジタルポプラディア2005』発売
2005年 2月	『総合百科事典ポプラディア プラス1 -2005補遺-』刊行
3月	『ポプラディア情報館』シリーズ刊行開始
4月	『ポプラディア学習帳』シリーズ発売開始（セイカ（現在のサンスター文具）より）
11月	『総合百科事典デジタルポプラディア プラス1 2006』発売
2006年11月	『総合百科事典デジタルポプラディア プラス2 VOICE』発売 インターネット版百科事典「ポプラディアネット」サービス開始
2011年 1月	『総合百科事典ポプラディア 新訂版』（全12巻）発売 『ポプラディア情報館』シリーズ7巻を同時発売、全50巻となる

図4 『月刊ポプラディア』2011年2月号

を、さらに翌々年『総合百科事典デジタルポプラディア プラス2 VOICE』を発売した。いずれもメディアはDVD-ROMであったが、毎月インターネットで補遺情報をダウンロードできるようにした。最後の版の『VOICE』は、本やノート、鉛筆から手を離さなくても操作できるようにとの願いから音声認識機能を搭載した。音声認識は急速に進化している分野だと思うが、筆者はいまだにこれが日本で最も使いやすい音声認識ソフトであると信じている。

この間、パッケージソフトからインターネット配信型への転換も進め、2006年11月、インターネット版の「ポプラディアネット」のサービスを開始した。これについては次章で述べる。

テーマ別の『情報館』シリーズは、2005年3月から

刊行を開始し、2011年1月で全50巻となった。五十音順では十分学習しきれない体系だった情報をテーマごとにまとめたものであり、より詳しい学習ができるように配慮されている。全50巻で、子どもたちの学習に必要な範囲をほぼ網羅するものとなっている(図5)。

こうして書籍、雑誌、インターネットと、子どもたちが必要とするすべてのメディアで百科事典を活用してもらえる態勢が整った。

なおこの間、無料で「ポプラディアネット」の一部を利用できる「ナビポ」(<http://navipo.jp/>)、その携帯版「モブポ」(<http://mobpo.jp/>)のサービスも開始した。サンスター文具から「ポプラディア学習帳」シリーズも発売されるなど、「ポプラディア」は学習ブランドとして大きく育っていった。

7. インターネット版開発の思想

インターネットで配信している「ポプラディアネット」(図6)は、『新訂版』、『情報館』シリーズと並ぶ、3つ目の大きな柱の1つである。同じテキストをもとにスタートしているが、インターネットでなければできないことを追求している。

デジタル版の特性として検索性に優れているのは言うまでもない。ポプラディア全巻の情報を瞬時に全文検索できるのは、紙ではあり得ない感覚である。音声、動画といった紙では表現し得ないものも数多く収載している。五十音順の百科事典は受け継いで

図5 『ポプラディア情報館』シリーズ(全50巻)

図6 「ポプラディアネット」の項目「イネ」

いるが、多くのリンク機能を活用することによって学習の発展性に優れたものとした。新しい項目を追加したり、統計情報など新しい情報を追加修正したりすることも当然行っている。ふりがなの有無を選ぶボタンも用意している。

学習の発展性についてもう少し詳しく記したい。書籍で「イネ」がテーマとなった本があるとする。この本には、植物としてのイネのことも、農業のことも、栽培の歴史のことも、食べ物としての文化のこともさまざま書かれている。「生物」「産業」「歴史」「食」は図書館の中で異なる分野として扱われる。図書館で購入された本は、登録され、装備がなされ、配架される。このとき、どの分野に配するかは図書館員、司書が決める。筆者自身、自分が担当した本が思わぬ分類を付与されて驚くことがある。「日本十進分類法」という大きな基準はあるものの、それをもとに決めているのは最終的には個人なのだ。図書

館は、同じ本は複数購入したとしても、それぞれに別の分類を与え、複数の場所に配架することは基本的にない。子どもが図書館で有効な本に出会えないのは、この配架のルールを理解していないため、ということも多いのだ。

「ポプラディアネット」では、複数の「関連テーマ」を表示して、五十音順の百科事典をテーマ別の資料のように使うこともできるよう配慮している(図7)。「イネ」の項目からは、稲作、工芸作物、穀類、被子植物、穀物へと案内される。各項目には、図書館の本も活用してほしいという願いをこめて「日本十進分類」(NDC)も付与している。「イネ」に対しては、479(被子植物)と616(食用作物)のように複数の分類を付与している。

「ポプラディアネット」は学校や公共図書館、家庭と、さまざまな場で活用されている。当初はIDとパスワードでユーザー管理する形態のみであったが、IP

「ポプラディアネット」の各項目は、25の大テーマに分類されている。各テーマの後ろに（ ）であらわされている数は、そのテーマに含まれている項目の数。25の大テーマは、さらに中・小テーマに分類されている。小テーマは1,400以上に細分化される。

図7 「ポプラディアネット」のテーマ別分類

アドレスで管理する仕組みも用意した。千葉県柏市などのように、市教育委員会として一括採用する自治体も増えている。柏市の場合、市内61の小中学校、6,000台のパソコンから自由に使えるようになっており、大変有効に活用されている。

ある大手の中学受験進学塾では、数万人の塾生全員が家庭学習で「ポプラディアネット」を利用している。この塾ではカリキュラムの理解度をはかるテストの結果をネット経由で閲覧できるシステムを構築していて、問題解説の中の重要語には「ポプラディアネット」へのリンクを張っているのだ。

このように、オンラインデータベースとしての「ポプラディアネット」の利用は拡大している。

8. 9年を経て新訂版に

『ポプラディア』シリーズ全体を通して蓄積してきたものをすべて活かし、2011年1月、『新訂版』を刊行した。旧版の発行から9年が経過し、もう補遺版では内容の修正が追いつかなくなっていた。市町村合併、省庁再編や独立行政法人化などの行政改革はわかりやすい例だが、日本も世界も社会が大きく変

化し、また科学の分野でも、「はやぶさ」など新しい研究成果が次々に生み出されている。こうしたことに対応して全項目を見直した。その結果、項目数は、約23,000項目から約25,000項目に。総ページ数も、約3,000ページから約3,500ページにと増加した。またこの『新訂版』では、『情報館』シリーズに詳しい解説のある項目はそのページを掲載し、参照できるよう工夫した。50巻にも及ぶ専門的書籍への対応づけは、百科事典として世界初の試みである。

前述のように、9年間にわたって50,000セットも販売してきたシリーズを改訂して、10,000セットも予約販売できたということは、それだけ活用され、なおかつ新しい情報に入れ替える必要があるとの認識がなされているという証左である。すでに、次の補遺版、三訂版についてのご質問も受けており、今後の展開については十分検討して進めていきたい。

9. 紙もネット版も、図書館もインターネットも

ここまで述べてきたように、『ポプラディア』シリーズには、「紙」も「ネット」もある。とかく、紙かネットか、という議論があるが、こと、子どもたちが学ぶ「知のデータベース」に関しては、この議論はナンセンスだと考えている。「紙」も「ネット」も、どちらも必要なのだ。そう信じてどちらもつくってきた。

紙を展開する大事な場としての図書館とインターネットを対比させて考えてみたい。

図書館は、人類の英知を集積し、それを体系づけ、手を伸ばせばいつでも利用できるように配架した場である。われわれは図書館に一步入った途端、人類の英知を一望することができる。紙、印刷という技術、本というメディアは、とても扱いやすく、便利で、図書館という空間の中で知のデータベースを構築してきた。

インターネットも人類の英知を集めた第二の場と

なっている。インターネットの登場によって、子どもたちが利用できる知の引き出しが増えたのである。ただし、インターネットはとても便利なものであるが、玉石混交であり、体系づけられていない。ここが図書館との大きな違いになっている。

図書館には、編集者、司書という専門家のフィルターを経た資料が集められており、それは利用者に対する大きな保証になっている。大人はインターネットと図書館の利用についてのこの基本的な違いを感覚的に理解しているが、子どもたちがこれを理解するのは大変難しい。

また、多くの場合、インターネットで「調べる」ことは検索エンジンに委ねられるが、子どもたちは無批判にその検索結果を受け入れてしまう。検索結果の最初の1行目から順にページを開いていき、調べたいことが見つかったらプリントアウトして、学習が終わった気になってしまうのだ。そこに比較や検証はない。

検索エンジンではピンポイントで、容易に知りたいことにたどり着けることが多いが、その背景となる全体像を見渡すことにはつながらない。図書館なら、書架の前に立っただけで、その世界を補足する資料のさまざまなタイトルに目がいく。書架の間をさまようだけで、情報の選別、絞り込む作業が無意識に行われている。検索エンジンはこの過程を飛ばし、本でいえばページの該当の行に一気に連れていてくれる。しかも近年、検索エンジンはますます進化している。検索のゆらぎに対応し、推測して導いてくれる。

ネット検索の優位性や情報提供のスピードに、おそらく紙はもう二度と追いつくことができない。また紙にはコストとスペースが必要となる。個人の選択肢としてこの問題は大きい。

子どもたちにとって、紙とネット版、図書館とインターネットは、比較し、どちらかを選ぶものではない。どちらにも良いところがあり、苦手なところがある。子どもたちには、図書館もインターネット

も正しく利用できるようになってもらいたい。それらの特性を理解し、必要なときに、より良いものを選ぶようになればいいのだ。

新しく校舎が建築される場合、学校図書館が、その校舎の中心、どの教室からも一番行きやすい場所に配置されることが多くなっている。また、図書館の隣にコンピューター室が置かれ、2つ合わせて学習センターとして機能するようになっていることも多い。一番望ましいのは、この2つの境がなく、鍵もかかっておらず、いつでも子どもたちが自由に利用できる環境にあることだ。子どもたちの情報収集の場は、いつでも開かれていてほしいと考えている。

10. おわりに

『ポプラディア』シリーズは、家庭でも図書館でも、冊子でもインターネットでも活用してもらえる日本語の唯一の子ども用百科事典である。今これに代わるものはない。大げさに思われるかもしれないが、このシリーズをより多く活用してもらうことは、子どもたちの学習をより豊かにしていくこと、日本の未来につながるのだと考えている。子どもたちの学習を支えるものとして、さらに発展させていかねばならない。

次回は、さらに「ポプラディアネット」の先進的な活用事例を現場の担当者とともに紹介する。あわせてオンラインデータベースの有効活用も論じたい。

Author Abstract

Encyclopedia for children plays an essential role in the "learning by consulting" curriculum and the "integrated study period" in elementary and junior high schools. The Encyclopedia Poplardia, first published in March 2002 in 12 volumes and recently revised, is the only encyclopedia in Japan designed for children. The publication originates from the needs for such an encyclopedia as is targeted at children, which grew as the school education aimed at nurturing the fortitude to live and the ability to solve problems. The Poplardia employs the longer/shorter entry types, with its content listed in the order of the 50-character kana syllabary. This article looks at how the Poplardia is edited, including how subjects are selected and what the editing policy is, and how it is used in school libraries. It covers the launch of new online service "Poplardia Net" and the first revision in 9 years. It also refers to the roles libraries and the internet play in teaching and learning and some of the challenges to be dealt with.

Key words

encyclopedia, knowledge, word, editing, school library, digitization, online, database, internet, information education